

ぼうさい通信 Vol.83



毎月16日は「防災教育啓発の日」

令和7年1月16日発行
熊本県立湧心館高等学校

今月のテーマ

「冬の火災について」

総務省消防庁の「消防白書」によると、2021年に全国で発生した建物火災の件数は19,549件でした。月別で見ると、もっとも多いのが1月で、次いで12月、2月と、冬から春にかけて多く発生しています。

冬は火災が発生しやすく、また被害も大きくなりやすい季節です。今月のぼうさい通信では、冬に火災が多くなる理由や火災の原因、発火場所ごとの対策などをまとめて紹介します。

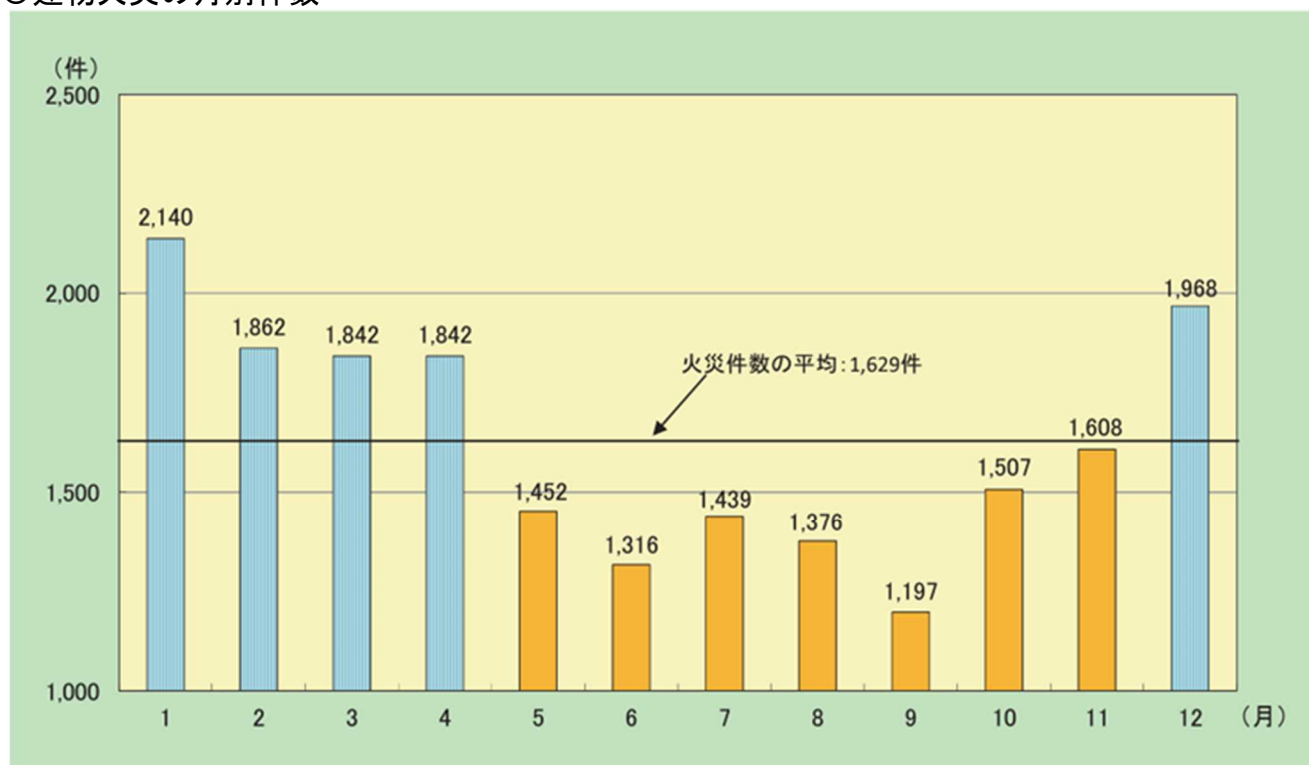
〇冬に火災が起こりやすい理由

冬に火災が発生しやすい理由は、大きく二つあります。一つが「空気が乾燥しているから」、もう一つが「暖房機器などの火を使用する機会が増えるから」です。

空気が乾燥すると、建物や家具などに含まれる水分量も少なくなり、引火しやすくなります。特に風の強い日は、ちょっとした火の気でも大きな火事につながり、被害を広げてしまうおそれがあります。

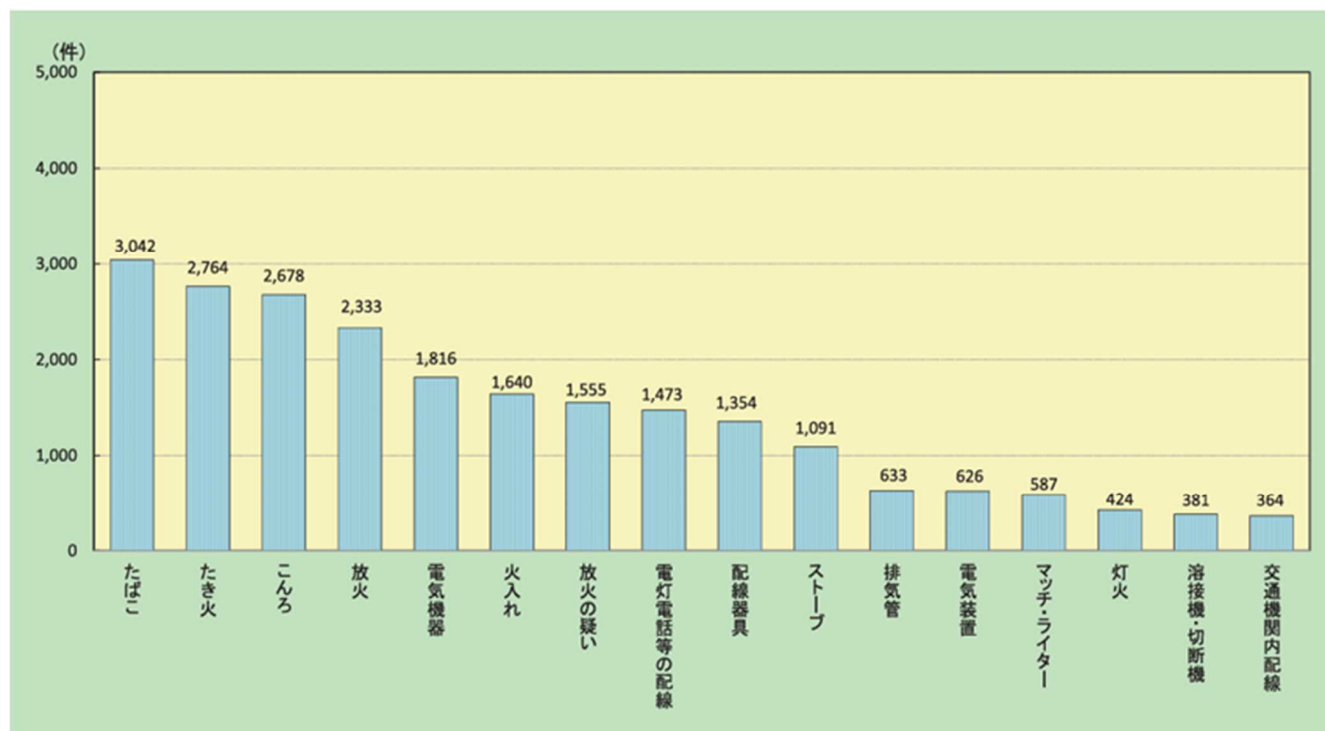
また、気温の低い日はストーブなどの暖房器具や、給湯などでコンロを使用する場面も増えます。火を扱うことが増えれば火災のリスクも高まりますから、冬場の火の取り扱いは十分に注意する必要があります。

〇建物火災の月別件数



出典：総務省消防庁「令和4年度版 消防白書（P35）」

○出火原因



出典：総務省消防庁「令和4年度版 消防白書（P58）」

2021年に発生した建物火災について、出火原因でもっとも多かったのが「たばこ」です。火災件数は3,042件で、全火災の8.6%を占めます。このうち1,921件が「不適当な場所への放置」とされ、いわゆる「たばこの不始末」が出火原因です。

3位は「コンロ」で2,678件、全火災の7.6%を占めます。このうち2,247件がガスコンロによる火災ですが、火を直接使わないIHクッキングヒーターも火災につながるケースがみられます。

最近では、電気機器や配線関連の火災も増えています。2021年のデータでは、「電気機器」が1,816件、「電灯電話等の配線」が1,473件、「配線器具」が1,354件、「電気装置」が626件となっており、電化製品の誤った使い方や老朽化が出火原因といわれます。

火災を防ぐには、火の取り扱いに細心の注意を払うことが大切です。特に冬場は、小さな火種でも大きな火災につながりやすいため、以下の点には十分に注意する必要があります。

- ①たばこの不始末を無くす
- ②コンロから離れるときは火を消す
- ③電気機器・配線をこまめにチェックする
- ④ストーブの近くに物は置かない

火災は一年を通して発生するものですが、特に冬は火の取り扱いが増え空気も乾燥するため、ちょっとした不注意が大きな火災につながりやすい季節です。

火を取り扱うときは細心の注意を払うとともに、万一火災が発生した際に備えることも大切です。火の近くには簡易消火具を設置するなど、いざというときの準備もしておきましょう。

過去のぼうさい通信を見ることができます ◎ぼうさい通信(毎月16日発行)

本校HPにアクセスしてみよう。 <https://sh.higo.ed.jp/yusinkan/>

くまもとマイタイムライン(デジタル版 マイタイムライン)は、

<https://portal.bousai.pref.kumamoto.jp/timeline/#/>で作成可能です。